

【日 時】
10/7(水)
13:00～17:50

【会 場】
鳴門教育大学
講 堂

教育実践フィールド研究 フォーラム

【フォーラムの目的】

教科・領域を異にする複数の学習チームがグループを組織して取り組んだ教育課題（構造化された教育課題）に対する成果を、プレゼンテーションにより公表し、互いに議論をすることを通して、受講院生の授業力と協働力の向上を図る。

人間教育専攻・特別支援教育専攻の個別チームの取組を、ポスターセッションにより公表し、互いに議論することを通じて、受講院生の授業力と協働力の向上を図る。

フォーラムを通じて、大学院カリキュラムのコアである「教育実践フィールド研究」の成果を教育現場に還元するとともに、社会的な評価を受ける。

● ポスターセッション(講堂1階フロア)

13:00～14:30

* ポスターは17:50まで掲示しています。

● プレゼンテーション(講堂)

14:40～17:50



プログラム

ポスターセッション 13:00 ~

- 人間教育専攻
- 特別支援教育専攻



プレゼンテーション

- 教科・領域教育専攻

14:00 ~

受付

14:40 ~ 14:45

開会のことば
(鳴門教育大学長 高橋 啓)

【総合司会】
鳴門教育大学
人文・社会系教育部 准教授
梅津 正美

14:45 ~ 14:50

本フォーラムの趣旨説明
(鳴門教育大学 人文・社会系教育部 准教授 山森 直人)

14:50 ~ 16:05

グループ ・ ・ の成果発表

16:05 ~ 16:15

休憩

16:15 ~ 17:05

グループ ・ の成果発表

17:05 ~ 17:25

質疑・応答

17:25 ~ 17:45

講評
(財団法人 徳島県体育協会 専務理事 宇山 孝人)

17:45 ~ 17:50

閉会のことば
(鳴門教育大学 理事【教育研究担当】 田中 雄三)

開 会

主催者代表挨拶

鳴門教育大学長 高 橋 啓



絵本（表現）を通し、心を育て、コミュニケーション力を培う国語教育

2009年10月7日（水曜日）

国語科

構想

美郷中学校テーマ

- ・中学生への絵本の読み聞かせを通して、生徒相互・教師と生徒の信頼関係を育て、学力を向上させる工夫



ブックトーク（絵本の紹介）

ブックトークとは？

- 図書の利用を促進させる目的を持って行う教育活動。

具体的な方法

- 1 特定のテーマに関する優れた読書群の選択。
- 2 それらを解説や批評を試みながら、順序よく紹介。



児童生徒、学生、図書館利用者の
図書の利用の促進

『ブックトーク-理論と実践-』全国SLAブックトーク委員会編
全国学校図書館協議会発行

私たちの考えるブックトーク



- 1 あるテーマに沿って、絵本を選ぶ。
- 2 その絵本を紹介するシナリオを作る。
- 3 それを織り交ぜながら絵本の読み聞かせを行う。

テーマ「友達」

3冊選書



『ともだちが』、『ゆうたはともだち』、『くまとやまねこ』

- 『ともだちが』
(内田麟太郎作・降矢なな絵・偕成社・1998)

- 『ゆうたはともだち』
(北山葉子作・文・あかね書房・1988)



- 『くまとやまねこ』
(湯本香樹実作・酒井駒子絵・河出書房新社・2008)

授業実践

○日時 2009年6月19日(金曜日)
6限(選択国語)

○場所 美郷中学校 蛍雪ルーム



○生徒数

	男	女	計
1年	0	0	0
2年	3	0	3
3年	1	1	2
合計	4	1	5

7

授業目標



ブックトーク

絵本の読み聞かせ



信頼関係 (生徒同士、生徒と教師)



学力向上

8

授業計画

○導入 ブックトークについて
(5分)

○展開 絵本の読み聞かせを含んだブックトーク
(40分) (別紙 プリント参照)

○まとめ テーマの確認
(5分)



9

まとめ

授業者

- 読書への誘い
- テーマ選書の重要性
- 感性への働きかけ(絵・音楽・言葉)



生徒

自発的な読み聞かせ

10

表現・こころ・コミュニケーション

美郷中学校側



構成の整った話の読み聞かせ



聞く力の育成



学力向上



11

表現・こころ・コミュニケーション



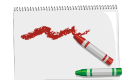
教師



絵本

絵本

生徒



12

教育実践フィールド研究

芸術系コース(音楽)

フィールド研究の背景 (実践上の課題)

子どもたちが音楽の美しさを探求し、
自分なりに表現を工夫していくために、
どのように働きかけていけば
(どのような“ことばがけ”をすれば)
よいだろうか？
(佐伯先生の悩みでもある)

フィールド研究の背景 (解決への手だて)

適切な発問が作り出される条件

↓

コミュニケーションを成立させる状況を作る
～「ねらい」の共有～

学習状況をふまえた目標と作業課題を工夫してひとつの単元を構想
コミュニケーションの現実化
子どもたちとの「かかわり」を意識して指導を試みた。

実践

対 象 附属小学校 第6学年

目 標 日本語の美しさと日本的な唱歌のよさを知り、曲全体の曲想を味わいながら、歌唱表現を工夫することができる。

教 材 歌唱共通教材「われは海の子」(文科省唱歌)

時 数 全2時間

作業課題

自分たちで
範唱用CDをつくる。

学習活動

教師の朗読を模倣しながら歌詞を朗読し、**文語体の日本語の美しい響き**を味わう。

身体表現を工夫し、**拍の流れとリズムの動きを感じとり**、歌唱表現に生かす。

歌詞の意味とふしのまとまりに注意しながら、より豊かな歌唱表現を工夫する。

演奏を録音し、**自分たちの演奏を客観的に聴いて**、意見を出し合いながらよりよい範唱用CDをつくる。

実践(1時間目)

7月2日

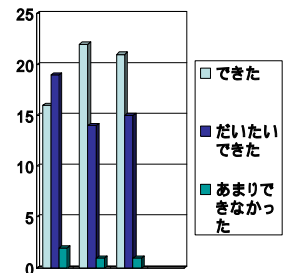


子どもたちの成果(1時間目)

設問 夏の海辺の様子を音楽から想像しながら,歌い方を工夫することができましたか。

設問 歌詞の読み方に注意して歌うことができましたか。

設問 歌詞を響かせて歌うことができましたか。



実践(2時間目)

7月6日

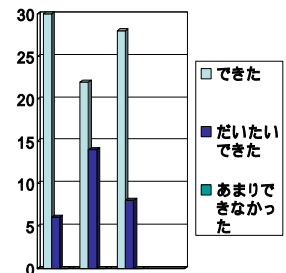


子どもたちの成果(2時間目)

設問 歌詞の歌い方や響かせ方に注意して歌うことができましたか。

設問 伴奏に注意して,息の使い方や,音楽にあった声の出し方を工夫することができましたか。

設問 音楽のもりあがりを感じて,それを生かして歌うことができましたか。



私たちの成果



作業課題のねらいを子どもたちと共有することによって,子どもたちの学習状況を的確に把握し,適切な発問を臨機に投げかけて,子どもたちの学習を活性化させることができた。

研究スタッフ

- 田中巳穂
- 星野真理
- 真鍋美恵
- 李カイ
- 長島真人先生
- 頃安利秀先生
- 森正先生
- 佐伯順一先生

徳島県近代美術館が所蔵する
彫刻作品を主題にした
鑑賞から表現につながる教材

表現・こころ・コミュニケーション
図画工作小学校班

鳴門教育大学附属小学校
森先生からの依頼

表現意欲を促す鑑賞教材の考案

題材の設定理由

- 徳島県立近代美術館が所蔵しており、身近に鑑賞できる。
- 彫刻作品は普段意識しない空間を意識させることができ、いろいろな見方をさせることができる。
- 本グループに彫刻専攻者が多いため、制作者側の視点も取り入れた教材づくりが可能である。

活動の流れ

- ・ 徳島県立近代美術館 (鑑賞)
- ・ 鑑賞シートを用いた作品づくり (表現)
- ・ 自分たちの作品を鑑賞 (鑑賞)

鑑賞の視点

- 作家を背景的に知る鑑賞もあるが、作品の要素の一つであるラインに絞るといふ解剖学的な鑑賞を目指した。



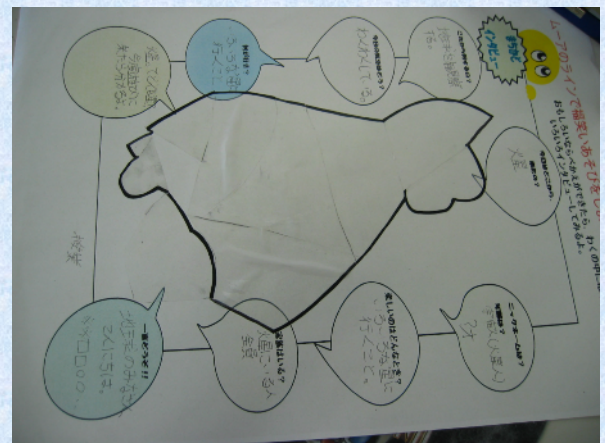
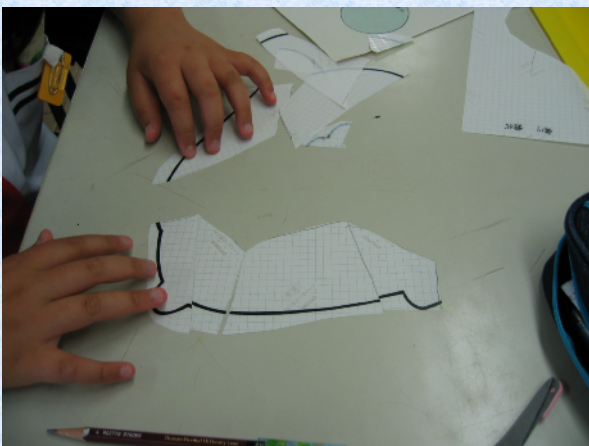
福笑い遊び

- ラインを自由に10分割し、福笑い遊びの手法を取り入れた活動を通して新しい自分のフォルムを作り出す。
- 作り出したフォルムのよさを感じ取る。
- 鑑賞シートに記入することで考え方や感じ方を深める。



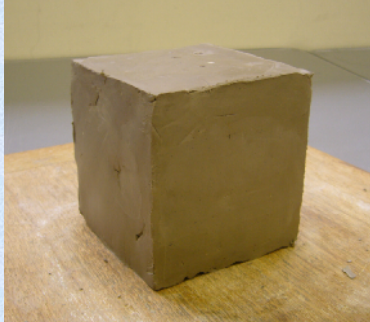
透明シートの工夫

- ラインが消えずに残るよう、透明シートを活用。
- 自由に好きなところで分割することとする。ただし、分割数が多くなると活動が煩雑となるため、分割数を10に決めた。



彫！キューブ！！

- 作品が平面的にならないように、粘土を塊(立方体)で与える。



彫！キューブ！！

- 自分が作り出したフォルムのよさや感じ方をより表現するために粘土を使って表してみる。



もう一度鑑賞しよう

- 作品を相互鑑賞してお互いのよさを感じ取る。
- デジタルカメラを使用して、好きな方向・角度から作品を撮る。



鑑賞の視点

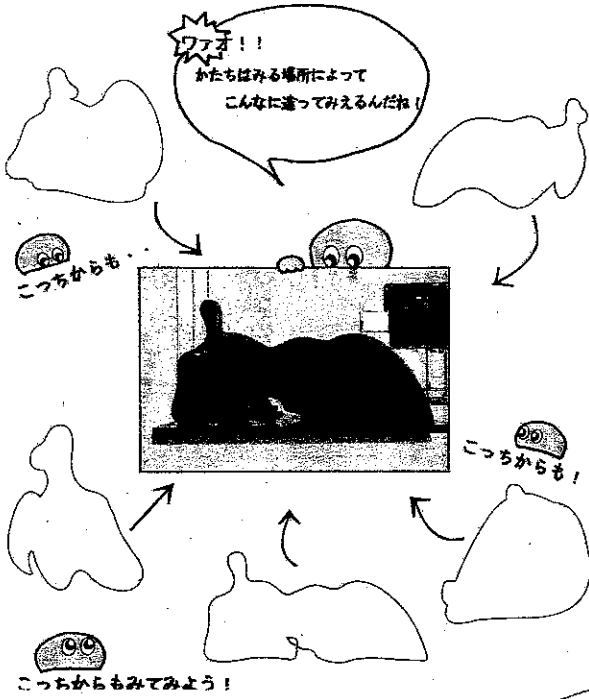
- 自然の外形そのままではなく、自然の形の中にある量感や、面の変化、動きなどの美を抽出することが、作者の制作の態度と思われる。
- 抽象化や単純化において、今回取り上げた彫刻作品の場合は単なる変形ではなく、人体を一つの量塊として、形態の要約を極限まで突き詰めている。一つの量感の強い盛り上がりや、えぐられた空間を示す作品の曲面は、自然の形を徹底的に追求することによって生まれた、純化され、洗練された曲面である。

今後の課題

- ・ 学習活動における作業が子どもたちに適していると考えていたが、思いのほか時間がかかり、容易に進めることができない子どももいた。もっと教材研究を進めてより円滑に行えるようにしていきたい。
- ・ 他の彫刻作品を題材にできるか研究していきたい。
- ・ 美術館で鑑賞することが理想としているので、附属小学校との連携を密にし、美術館における鑑賞活動が行えるようにしたい。

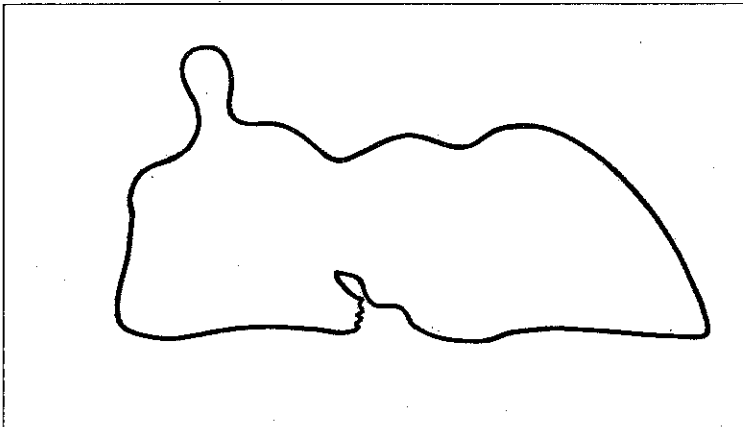
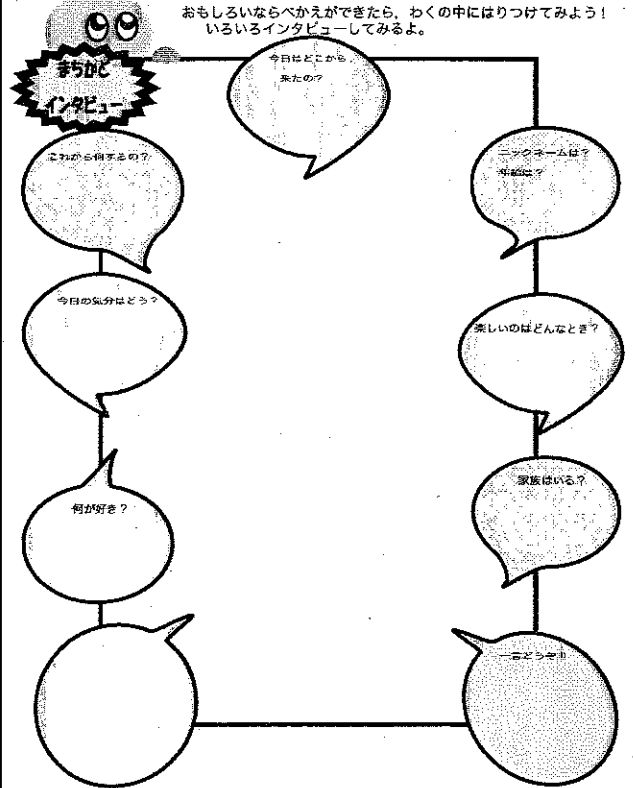
ラインから生まれるかたち

この形別は、イギリス人の彫刻家ヘンリー・ムーアの作品です。ムーアは「母と子」をテーマにした作品をたくさんつくりました。お母さんの体は大きくてよくくらしていますね。ムーアの作品の特徴の一つです。このように、ムーアは産じたことをよりよく表現するためにかたちを大切にしてつくりました。



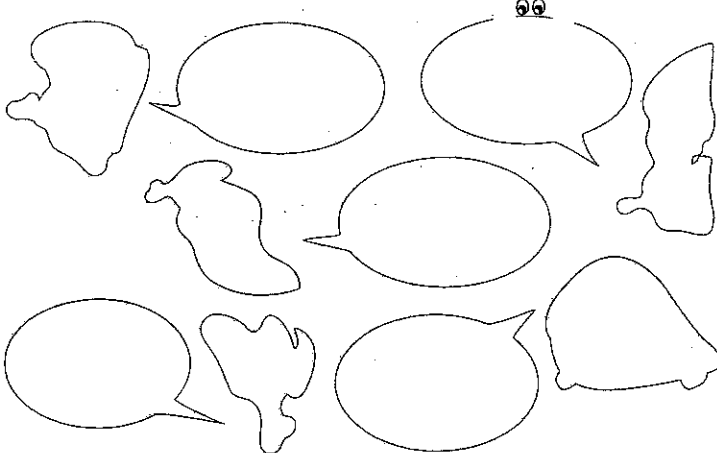
ムーアのラインで福笑いあそびをしよう!

おもしろいならべかえができれば、わくの中にはりつけてみよう! いろいろインタビューしてみるよ。



何に見えるかな?

おもしろいかたちだね!



ふり返りカード

6年 組

1 友達の作品の好きなおところはどこですか。

さんの作品は が とってもすばしかったです。

2 自分の作品で気に入っているところを教えてください。

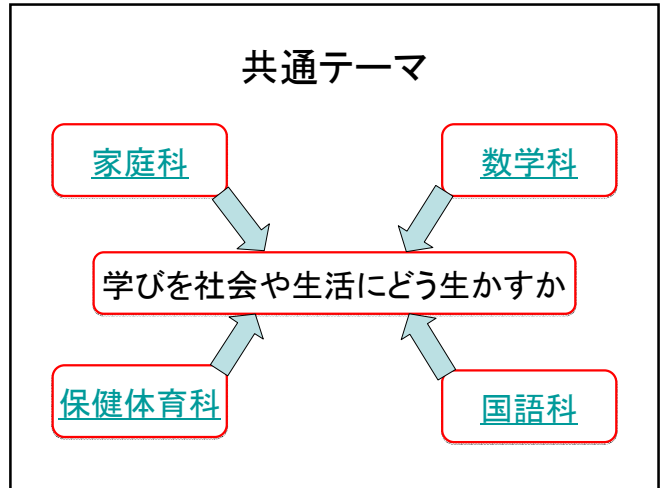
の が お気に入りです。

3 今回の学習で一番楽しかった活動はどこですか。



**教育実践フィールド研究
グループⅡ 社会・地域・暮らし**

家庭, 数学, 保健体育, 国語



**中学校家庭科住生活領域
における授業実践**
—体験的学習活動・言語活動を取り入れて—

2009.10.7
生活・健康系コース(家庭)
石井淳子 木下みゆき 中林啓

研究目的

```

      graph TD
        A[住生活領域] --> B[体験的学習活動]
        B --> C[言語力・言語活動]
        C --> D[生活実践力の向上を目指した授業実践の工夫]
      
```

研究方法

1. 授業方法

```

      graph TD
        A[住生活に関する授業] --> B[体験的学習として  
実験・実習]
        B --> C[言語力・言語活動として  
まとめ・発表]
      
```

2. アンケート

授業実践前

- ・生徒の生活経験
- ・題材への興味・関心の把握 (グループ分け)

授業実践後

- ・授業成果の確認

授業実践内容

- 授業実施日：平成21年5月20日、29日、6月15日、17日
- 授業題材：快適な住まいについて考えよう。
- 対象学年：附属中学校 1年生


		Aグループ	Bグループ
1時間目	実験・実習	空気調節	湿度・結露
2時間目	実験・実習	防音	カビ・ダニ
3時間目	発表準備	空気調節、湿度・結露、防音、カビ・ダニ	
4・5時間目	発表・まとめ		

1時間目 実験・実習①

空気調節 (Aグループ)

実験教材
窓がない・窓が1つ・窓が2つの段ボール、お香


授業内容
窓の数が異なる3種類の模型を観察し、煙の出方の違いを理解する。



湿度・結露 (Bグループ)

実験教材
ピーカー、発泡スチロールカップ、温度計、保冷剤または水

授業内容
結露ができる仕組みを理解するための実験を班ごとに行う。



2時間目 実験・実習

防音（Aグループ）

実験教材

段ボール、カーテン、騒音計、キッチンタイマー

授業内容

騒音計を用いて音の大きさを測る実験を班ごとに行う。



カビ・ダニ（Bグループ）

実習教材

食パン、ビデオ、顕微鏡一式

授業内容

食パンに生えたカビを観察する。顕微鏡でカビを観察する。ビデオでダニを見る。



発表準備・発表

発表準備（クラス全体）

授業内容

「発表の手引き」に発表内容を書き込み、画用紙に書き写す。



発表（クラス全体）

授業内容

発表会を通して、快適な住まいにするための方法と内容を共有する。



授業実践の成果

体験的学習活動から

実験・実習を取り入れた授業の有効性が示唆された。
快適な住まい方の工夫を生活で実践する意欲が見られた。

言語活動から

まとめ方や発表方法を工夫することで表現力を高めることができた。
快適な住まいにするための方法と内容を共有し、互いの課題の比較と統合を図ることができた。

授業実践を通じた課題

建設的質問の引き出し、質問への対応力

生徒が学んだことを高めあう質問を引き出すための支援、その質問を知識として全体に還元する対応力、住生活領域の専門力が教員に不足していた。

生活実践力向上のための家庭との連携

生徒の学習意欲や実践意欲は見られたが、実生活に結びついたかどうか確認できていない。
家庭と連携した生活実践課題によって生活実践力を検証することが必要である。

数学と実生活のつながり

平成21年 10月7日(水)

自然系(数学)コース

- ・ 鎌 苅 直 人
- ・ 寺 奥 久 滋
- ・ 長 木 力 也
- ・ 西 井 暢 彦
- ・ 松 田 勇 輝

グループのねらい

学びを生活や社会にどう生かすか

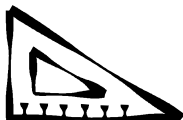


数学グループでは…

学びが生活や社会に
生かされていることを知る

授業実践

- ・ 授業実践日
平成21年5月22日(金) 1,2校時
- ・ 対象学年
附属中学校 第2学年 選択数学
男子13名 女子4名
- ・ 授業の単元
図形 定幅図形

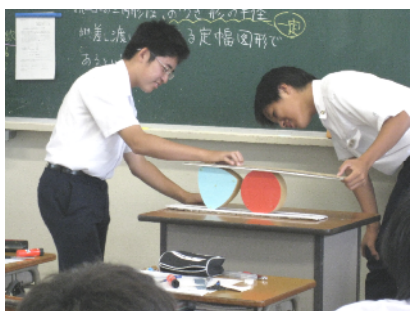


授業のねらい

- ・ 定幅図形を用いることで日常生活の中に、数学の性質を見出し、図形を用いる事の有意性を感じさせる
- ・ 既習の性質を満たす図形をより広く学ぶことで、図形の要素に関する認識を深める



生徒の取り組み



- ・ 差し渡し幅が一定になることをコロを使って確認している様子

アンケート結果

気がついたこと, わかったこと

- ・ 日常生活にひそむルーローの三角形が分かった。
- ・ 円と同じような進み方をする。
- ・ ルーローの三角形は身近に使われていること。
- ・ いろんな図形があったのでびっくりしました。
- ・ ルーローの多角形は三角形とか五角形とか奇数のときにできる。

授業を受けての感想

- ・ 今まで知らなかったことが分かって楽しかった。
- ・ 三角形みたいなのに、円みたいな性質を持っているので不思議だった。
- ・ 図形について他のこともやってみたい。
- ・ 数学を身近に感じる事ができてよかったです。
- ・ 色々な先生が来ておもしろいと思いました。まだ習ってないことをもっと教えてほしいと思いました。
- ・ 作業ができてよかった。

成果と問題点



成果

- ・ 数学が日常の中で使われていることを感じてもらった。
- ・ 興味関心を持った生徒が多かった。

問題点

- ・ 普通の授業では取り扱いにくい教材であるので、普通の授業との関わりも考えて授業を行わなければならない。
- ・ 作業をするにあたっての時間配分を考えなければならない。
- ・ 視覚教材の使い方、使うタイミングを考えなければならない。

グループ
社会・地域・暮らし

鳴門の海を体感する里海体験活動

生活・健康系 保健体育コース
国田恵理
長田則子
升本絢也

実習の教育目的

自然における活動を通して、自ら選択し、自ら行動し、自ら責任を持つ能力を養う。



城北高校 野外実習

- 日時: 7月21日(火) ~ 22日(水)
- 場所: 鳴門教育大学および周辺
- 参加者: 高校2年生 8名
- 指導者: 引率教師1名
南先生、国田、長田、升本

事前の活動・準備

- | | |
|---------------|---------------|
| 12月 | 5~7月 |
| • 冬期野外活動に参加 | • カヌー・カヤックの練習 |
| | • スキンダイビングの練習 |
| 1~4月 | • テント設営の仕方 |
| • 城北高校との打ち合わせ | • つりの練習 |
| • プログラム作成 | • 道具の確認・準備 |
| | • 日食観察の準備 |

1日目日程

ー雨プログラムー
9:00 大学着
9:30 アイスブレイキング 体づくり運動
12:30 昼食
13:30 スキンダイビング
15:00 買い出し
16:00 テント設営
17:00 夕食
21:00 ミーティング
22:00 就寝

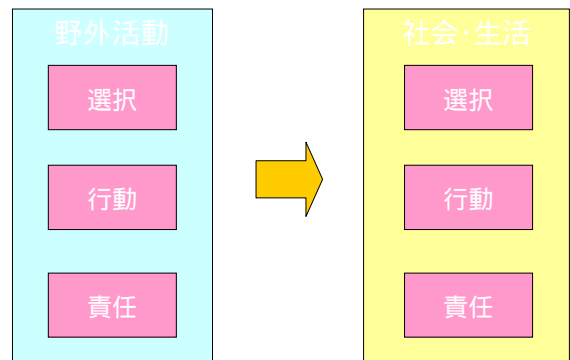
2日目日程

6:00 起床
6:30 釣り
8:00 朝食、片付け
9:00 日食準備
9:30 カヌー練習
10:30 ツアー出発
12:00 昼食
15:00 解散

反省・感想

- 生徒を自分たちでしかることができなかった。
- 指導に夢中になり捻挫をした。
- 天候に合わせたプログラムの変更ができた。
- 日食の観察時間を十分に確保できなかった。
- 生徒に注意を促していたが怪我をした。
- 生徒が中盤から積極的に活動し始めたため、プログラム通りに進行した。
- 生徒が主体的に活動できるようなサポートが必要だった。
- 今後の課題として、野外活動での生徒の変化を把握するための尺度が必要である。

学びを社会や生活にどう生かすか？



国際化社会における多文化共生のために —地域における日本語教室での実践—

言語系コース(国語) 日本語教育分野

姜楊、三國可奈、三村早苗
富岡直美、韋敏、張璇

研究の背景と目的

近年、日本在留外国人が増加し続け、
地域の日本語教室で学ぶ外国人学習者は、
年齢や生活環境が多様化している。

地域の日本語教室で求められている授業は
は
どんな授業なのだろうか？

二つの日本語教室についての調査

	ベトナム人研修・ 技能実習生 の日本語支援	鳴門市 日本語教室
学習者の 要望	楽しい日本語学 習 (日本文化・漢 字)	生活のための日本 語 様々な人との交流

ベトナム人研修・技能実習生 授業実践報告

- 日 時： 2009年4月15日(水) 19:00～20:30
- 学習者： ベトナム人研修・技能実習生(男女3名ずつ)

工夫点

楽しく視覚的に色の語彙を導入する。

折り紙の使用(色当てゲーム、折り紙体験)

ベトナム人研修・技能実習生 成果

教材を多様化させるなどの工夫をする



学習意欲を高め、楽しい日本語学習
へつながる

鳴門市日本語教室 授業実践報告

- 日時：2009年5月27日(水) 19:00～20:30
- 学習者：鳴門市在住中学一年生(中国人男女1名ずつ)

工夫点

視覚的に生活語彙を導入する。

絵本『はらぺこあおむし』を利用する。
(曜日、数え方、食べ物の名前など)

鳴門市日本語教室 成果

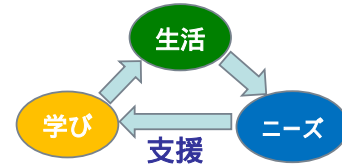
年齢に配慮し、
興味を引くような活動を取入れる



印象に残りやすく、定着しやすい

地域の日本語教育

- 地域の在留外国人は在留目的が多様多様であり、
そこで必要とされる日本語教育もまた一様ではな
い。



- 地域の日本語教育の場は、外国人同士や日本人
との交流の場でもある。
交流を深めるようなタスクの導入(今後の課題)

まとめ

- 学びを社会や生活にどう生かすかだけでなく、
社会や生活からも学びにつながっている。
- 社会や生活を学びに結び付けていくことで、
新たな発見や興味・関心が生まれ、高められ
ていく。



- 社会や生活と学びを結び付けていくことが必
要である。

平成20年度「教育実践フィールド研究」 グループ：教材研究・教材づくり

自然系(数学)院生 檜尾和則・中西健之・松本隆介
指導教員 廣瀬隆司・成川公昭
外部講師 神戸女子短期大学教授 水島賢太郎

数字に対する興味・関心を高める教材づくり (古代の数字で書いてみよう:エジプトの数字とバビロニアの数字)

研究の背景

数学史を概観するとき、現在使用されている十進位取り記数法は、古代エジプトの記数法と古代バビロニアの記数法でも使用されていたことが分かる。ただ、古代バビロニアの記数法では、六十進法も使用されていた。そして、古代エジプトと古代バビロニアで使用されていた数字は、現在使用されているアラビア数字と全く異なっている。

このような古代エジプトの数字とその記数法、古代バビロニアの数字とその記数法を教材として採り上げることは、児童の活動の場を広げ、児童の興味・関心を高めると考えた。また、第1学年から学習している十進位取り記数法を再考し、六十進法について考えることは、意義があると考えた。

研究の目的

本研究では、古代エジプトの数字とその記数法及び古代バビロニアの数字とその記数法に関する調査を行い、調査結果の分析と考察を通して、児童の興味・関心を高める教材づくりを行うことを目的とする。

研究の方法

(1) 調査の対象と授業の対象

古代エジプトの数字とその記数法については、神戸市内の第5学年の児童107名、古代バビロニアの数字とその記数法については、神戸市内の第5学年の児童38名を調査の対象とした。

鳴門教育大学附属小学校の第5学年の児童(3クラス)を授業の対象として、調査結果の分析と考察により開発した教材の授業実践を行う。

(2) 手続き

a. 平成20年度「教育実践フィールド研究」での取り組みの計画(資料1)

b. 先行研究

先行研究として、「数字の歴史(ジョルジュ・イフラ -, 平凡社)」を中心に調べた。

c. 調査と調査結果の分析方法(別刷り資料2)

古代エジプトの数字と古代バビロニアの数字をそれぞれ提示し、例えば、53, 60, 532をどのように表すかを尋ねた。先行研究を基に、調査結果を「加法・横書き」、「加法・縦書き」、「倍加法・横書き」、「倍加法・縦書き」、「アラビア数字様式」、「その他」、「無答」というように分類した。

d. 学習指導案の作成(別刷り資料3)

e. 授業結果の分析と評価

f. 授業実践の成果発表

平成20年度「教育実践フィールド研究」での取り組み

- 1 今日の学校教育の課題とそれをめぐる論点・争点(5月～7月, 5回分)
 - (1) 前年度「教育実践研究」の成果の発表, その意義の解説(1) . . . 全学
 - (2) 前年度「教育実践研究」の成果の発表, その意義の解説(1) . . . 全学
 - (3) 今年度「教育実践フィールド研究」のねらい, 到達点の探求 . . . 全学
 - (4) 教科教育の視点から見た教育課題の探求 . . . 11 数学
 - (5) 今年度の研究課題・テーマの説明 . . . 全学

- 2 教育課題についての共通理解づくりと算数科の特性を活かした教育課題へのアプローチ(10月～11月, 7回分)
 - (1) 当該の課題・テーマに取り組む視点と方法の明確化 . . . 4 チ - ム合同(10/8)
 - (2) 算数科教育の目標論・内容論に基づく課題・テーマの研究 . . . 11 数学(10/16(木)9:00～12:00)
 - (3) 算数科教育の方法論・評価論に基づく課題・テーマの研究 . . . 11 数学(10/23(木)9:00～12:00)
 - (4) 当該の課題・テーマに取り組む視点と方法の明確化(講師依頼) . . . 11 数学(10/31(金)9:00～12:00)

- 3 子ども・教師の視点からの教育課題に向けた教材研究・授業開発(11月～1月, 8回分)
 - (1) 課題解決・テーマ追求の方向性の討議(講師依頼) . . . 11 数学(11/14(金)9:00～12:00)
 - (2) 問題意識の共有化と個別化 . . . 11 数学(12/4(木)9:00～10:30)
 - (3) 課題解決・テーマ追求の方向性の討議(講師依頼) . . . 11 数学(12/12(金)9:00～12:00)
 - (4) 課題解決・テーマ追求の視点と方向性の発表, 意見交換 . . . 4 チ - ム合同(2/4)
 - (5) 算数科教育の教材研究, 授業計画(評価を含む)・指導案作り . . . 11 数学(2/9(月)2:30～4:10)

- 4 子ども・教師の視点からの教育課題へのアプローチ(2月～3月, 5回分)
 - (1) 算数科教育の授業参観(附属小学校第5学年) . . . 11 数学(2/19(木)9:30～10:10)
 - (2) 授業計画の意見交換 . . . 11 数学(2/23(月)2:40～5:00)
 - (3) 附属小学校第5学年での授業実践(院生3名) . . . 11 数学(3/5(木)9:40～11:30,
3/6(金)11:40～12:25)
 - (4) 授業実践の反省(講師依頼) . . . 11 数学(3/6(金)13:00～2:30)
 - (5) 課題・テーマに係わる附属小学校教員との意見交換 . . . 4 チ - ム合同(3/11)

- 5 教育課題の解決への授業改善と成果のまとめ(4月～6月, 2回分)
 - (1) 教育課題の解決への授業改善に対する意見交換 . . . 全学(4/15(水)14:40～15:30)
 - (2) 教育課題の解決への授業改善に対する意見交換 . . . 4 チ - ム合同(6/3(水)14:40～16:10)

- 6 授業実践の成果と課題(9月～10月, 3回分)
 - (1) 授業実践の振り返り, 成果と課題の確認 . . . 11 数学(9/14(月)10:00～11:30)
 - (2) 授業実践の成果発表の準備 . . . 11 数学(9/25(金)13:00～14:30)
 - (3) 授業実践の成果発表 「教育実践フィールド研究」フォーラム . . . 全学(10月7日)
: M1の授業と相互乗り入れで実施

教育実践フィールド研究

グループ3

8 社会科

社会系コース

- 麻生 多聞 鳴門教育大学准教授
- 伊藤 直之 鳴門教育大学准教授
- 町田 哲 鳴門教育大学准教授
- 阿蘇波 善明
- 山崎 正史
- 勢造 牧人
- 本村 芳典
- 中西 啓
- 前田 大地

映像教材の教育的意義

- 演繹的アプローチ
映像教材の活用を「学習の出発点」にして、
そこで学んだことを応用しつつ、具体的な社会事象を把握させてゆく
- 帰納的アプローチ
単元内での疑問を解決したり、さまざまな事象の学習から「まとめ」を導くために、映像教材を活用する

映像教材の構成

1. 表現内容の選択・構成
2. 表現内容の表現・媒体
3. 表現過程の導入
4. 表現過程の展開
5. 表現過程の終結
6. 子どもの学習と教師の教授に配慮した表現

歴史分野

1. 第十堰がもたらすもの
2. 史料・インタビュー映像・先行研究
3. 「堰」ってなんだろう？
なぜ第十堰が作られたのか？
4. 工事を行うことのメリットとデメリット
5. オープンエンド その他の歴史的建造物に興味を持たせる

公民分野

1. 警察の仕事ってなんだろう
2. インタビュー・フィクション映像
3. 警察はどんな仕事をしているのか？
4. 警察にも守るべきルールが定められている
5. オープンエンド 市民の生活を守るために他にどんな仕事をしているか考えさせる

効果的な使い方1

- **パターン1: 理解・振り返りアプローチ**
映像は一気に見せてしまう。途中で止めると、せっかくのストーリー展開が切れてしまい、「面白み」を欠いてしまう。まずは全体を見せておき、あとで理解した内容を振り返らせたり、重要な概念を吟味させたりする。
- **パターン2: 予想・確かめアプローチ**
映像は要所所で止めながら見せる。一気に見せると、内容は右から左に抜けてしまう。ナレーションの問いかけを参考にして随時画面を止め、子どもにしっかり予想や分析させながら、キャラクターと一緒に探求させる。

効果的な使い方2

- 昨年度の協力校教員による実践では、パターン1、パターン2、両者の組み合わせ、の3つの活用例が見られた。実際の授業では、学年段階、子どもの既有知、指導目標などに基準にして、適切な活用法を選んでいた

まとめ

- 学生の技術的なスキルアップ
パワーポイント、プレミアエレメンツ等のソフトウェアを扱い技術を取得
- 児童の視点に沿った社会事象の追求
わかりやすい言葉で表現する、教育内容の選別
- 外部機関との連携
専門家、警察、NHKとの相互協力・出演協力

「表現につながるような鑑賞の題材開発」(美術科)

院 生 有井由佳・坂本優・田中信幸・那須真由美・八木聡悟

指導教員 山本朝彦・西田威汎・長岡強・武市勝・松島正矩・小川勝・鈴木久人
内藤隆・野崎窮・山田芳明・宮越千佳(附属中)(順不同,敬称略)

1 研究の流れ

情報の収集

各分野の講義を受講
(絵画・版画・彫刻・デザインなど)

実施する題材の検討・絞り込み

題材の開発

学習指導要領の読み込み
題材原案作成
授業実践に向けて附属中と打ち合わせ

授業実践

現職教員による模擬授業
指導案・教材の作成, 模擬授業
附属中で授業を実施 (H21.3.5)

事後研究

2 題材について

題材名「版画へのとびら」(鑑賞)

～版画の代表的な4つの技法を学び, 版画作品を味わおう～

題材の内容

- ・版画の歴史をとおして, 版画の鑑賞にかかる基本的な知識(代表的な4つの技法)と, 版画が「複製」から「表現」に展開し, 現代の美術に不可欠な分野になったことを理解し, 鑑賞の能力を高める。
- ・鑑賞活動をとおして版画作品のよさを味わい, 表現を意欲的に行うことができる。

(本題材は版画表現の題材に先立って実施することが望ましい)

3 授業実践の内容

実施日時・会場

平成21年3月5日(木)・附属中美術室

対象学年・授業者

第1学年40名・坂本 優

授業のながれ

導入 「版画」の理解

版画の定義を確認する

展開 「なぜ版画で表現するのか」

複製の歴史(版画の歴史)をたどる

表現活動へ(「分の」で生まれる価値)

展開 「技法の違いを探る」

参考作品をもとに代表的な4つの技法を学ぶ

(凹版・凸版・孔版・平版)

展開 「参考作品を見てみよう」

気に入った作品をじっくり味わう

鑑賞の感想を友だちと語り合う

終末 「本時のまとめ」

4 事後研究

授業実践の事後指導から

- ・本題材をベースにして, どの学年どの校種に対しても実践することができる内容である。
- ・展開 (作品鑑賞)における生徒の反応が大変良かったことを考えると, 展開を展開 と の前に持ってきて, 生徒の興味・関心を引きつけてもよかったのではないか。
- ・内容を精選したにもかかわらず, 時間が足りなかった。
生徒の感想から
版画の定義や技法, 見方や味わい方については理解できたが, 自他の意図や視点で鑑賞を行う点については, 十分に取り組むことができなかった。

5 まとめ

- ・鑑賞活動より長い時間を要した説明部分を精選するとともに, 「鑑賞力」を育てるための手だてについて研究をすすめる必要性を感じた。
- ・授業が生徒と教師, あるいは生徒同士のコミュニケーションの場であることを常に考えながら, 題材を開発することを学んだ。
- ・年齢に基づく発達の要素と個々の学習歴による学習成果の差異を, とともに重視する姿勢を学んだ。

グループIII:教材研究・教材づくり 芸術系(音楽)コース 発表資料

2008年度
教育実践フィールド研究

文化としての理解を目指した
音楽鑑賞の工夫

～音楽科鑑賞授業『木星』～

ねらい 「総譜に親しむ」

総譜を見ながら鑑賞すること
で、より深く楽曲を楽しむ。

総譜とは

オーケストラ等のすべての楽器
をひとつのページにまとめた楽
譜。指揮者はそれを見て、オー
ケストラを指揮します。学校現場
で子どもたちがそれを見る機会
は少ない。

総譜の配布

- ・今回は、音楽之友社の許可を得
て、『惑星』全曲から木星の箇所
40ページだけを取り出しました。
それに、ガイドを付け、拡大コ
ピーをし、生徒に1部ずつ授業中
貸与することにしました。

パフォーマンス課題

具体的な作業(ごっこ遊び)に取
り組むことで、子ども達の内面を
引き出す学習法のひとつ。

チラシを作ろう!!!

今回、開催されるオーケストラのコンサート
では、ホルスト作曲 大管弦楽組曲『惑星』
より「木星」を演奏します。皆さんには、演
奏会のチラシに載せる案内文に、これから
聞く「木星」の第3主題の部分についての
執筆を依頼したいと思います。あなたが書
いた案内文を読んで、コンサートに行きた
くなるような内容にしてください。

授業後報告

- 総譜を目で追えない生徒もいた
が、集中して聴くことができた。
- 総譜に出会い、聴くだけではわか
らない作曲家の音楽上のしかけを
理解することができた。

今後の課題

- 楽器編成が少なく、総譜を目で追
いやす教材、例えばヴィヴァル
ディの『四季』などについても同様
の教材を開発する。

具体的には

ホームページをごらんください。

[http://fs.indigo.naruto-u.ac.jp/~
hyamada/field2008/field2008.htm](http://fs.indigo.naruto-u.ac.jp/~hyamada/field2008/field2008.htm)

グループ 教材・教具の活用

生活・健康系コース(技術・工業・情報)
 社会系コース
 生活・健康系コース(保健体育)
 言語系コース(英語)

はじめに

グループ テーマ 「教材・教具の活用」

グループ内の合同ディスカッションでテーマの具体化

1. 学習課題に興味を持たせるような教材の開発・利用・工夫
2. 惹きつける、楽しく学習できる学習方法
3. 力をつけられる教材の開発と利用
4. 学力にもたらず教材の影響・効果
5. 身近にあるものを使って教材にしてみよう

各コース共通テーマ

「ひきつける、力をつけられる」教材・教具
 の開発、利用、工夫を考える。

各コースの具体的な教材

- 生活・健康系コース(技術・工業・情報)
 -「木材の曲げ加工と作品製作」
- 社会系コース
 -「GISを活用した社会科の授業」
- 生活・健康系コース(保健体育)
 -「武道の指導における教具の工夫」
- 言語系コース(英語)
 -「英語ノートの活用」

生活・健康系(技術・工業・情報)コース

木材の曲げ加工を利用した 独創的な木製品の製作

指導教員 尾崎 士郎
 永野 直
 元田 卓志
 竹口 幸志
 野村林太郎

研究の目的

「ひきつける、力をつけられる」教材・教具の
 開発、利用、工夫を考える。



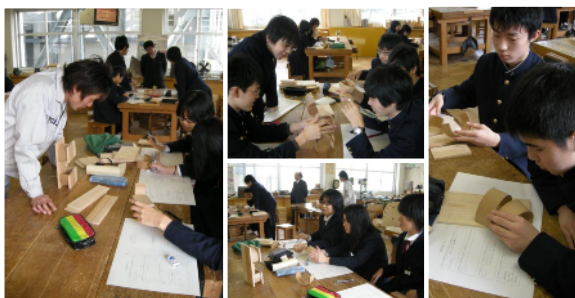
- | | |
|----------------|----------|
| 1. 材料の特性を知る | 知識・理解 |
| 2. 意外性に気づく | 関心・意欲・態度 |
| 3. デザインを考え加工する | 技能・表現 |
| 4. 曲げ木を活かした加工 | 思考・判断 |

授業スケジュール

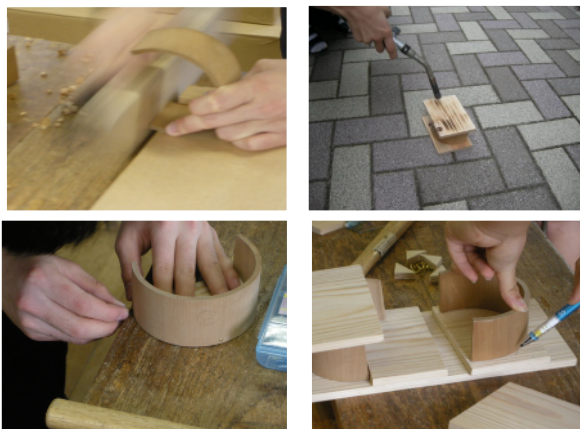
鳴門教育大学附属中学校 3年生 16名 選択技術

次	小単元名及び目標	主な活動
1	曲げ材とは	パワーポイントの資料を見ながら木材の性質について知る。曲げ加工の実演
2	作品製作実習1	作業の説明・材料の選択と名前がき
3	作品製作実習2	作品製作(けがき・穴あけのり付け・くぎ打ち・やすり)
4	作品製作実習3	
5	作品製作実習4	
6	作品製作実習5	作品完成・アンケート

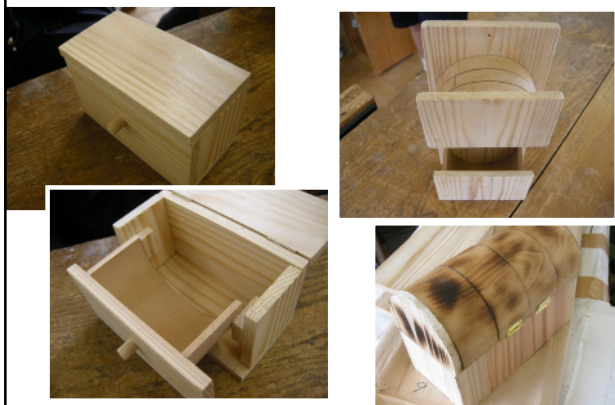
授業実践(設計と材料の選択)



作品製作実習



生徒作品



アンケートについて

- 実施日 平成21年2月26日
- 対象 附属中学校 3年技術選択者 16名
男子11名 女子5名
- 回収数 15
- 方法 選択項目と自由記述

実習が終了した最後の授業の10分間で実施

書き終わらない生徒が多かったため、後日回収した。

アンケート結果(抜粋)

- 面白かった
- あまり見ない普段使わないものだったから興味を持った
- 今までにやったことのない加工に挑戦してみたから
- くぎ打ちを先生に教えてもらいながらできたから
- 曲げ木に興味を持てたので作品の完成が楽しみだったから
- パーナーを使って模様をつけた(2)
- 新しい加工方法に挑戦してみたから
- 普段は使えないような材料だったから
- 頑張ったから

すべての生徒が熱心に取り組めたと答えた。

社会系コース

GISを活用した地理授業

指導教員 立岡裕士

谷 博美・福井寛明・松永達矢
李 高娃・加藤遼介・矢田篤史

協力校：附属中学校

GIS

本実践では、

コンピュータを用いて、

地図化された教材を作成・提示し、
あるいは地図上での作業をする、

ための技術として利用する

作業課題 (2005年度からの5年目)

- ・パッケージ化された教材
- ・それを利用した効果的な授業

対象: 中学2年社会(地理的分野)

単元3「地域間の結びつきの特色をとらえよう」

世界の交通・通信網と日本

学習課題

技術の発達により地球は小さくなった
しかし不均等に小さくなった

ことを理解させる

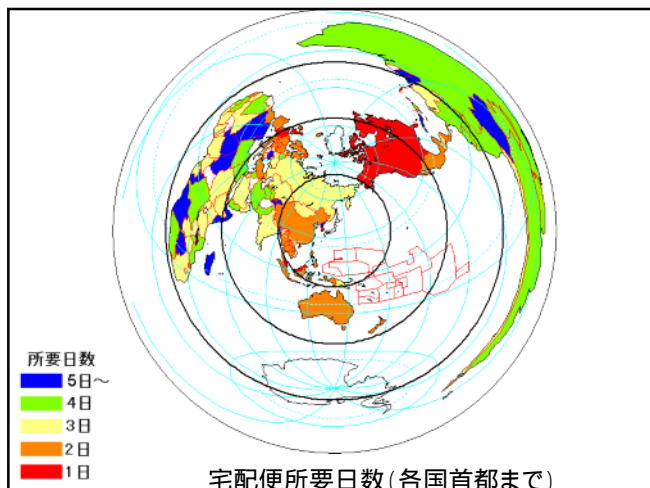
そのために

- ・過去と比べ時間距離が短縮した
- ・短縮の仕方(結果)が不均等である
(物理距離と時間距離とは比例しない)
ことを資料から読み取らせる

教材の作成

- ・時間距離の短縮
1940年の航路所要日数
2008年の航空路所要時間
- ・時間距離の不均等短縮
宅配便の配達日数

資料を地図化し、
PowerPointで表示する



授業の構成

- 1 (導入 5分)
海外旅行(ハワイ)の話
- 2 (展開1 15分)
移動時間の比較(1940年・2008年)
- 3 (展開2 20分)
物理的距離 時間距離
- 4 (まとめ 10分)

成果

- ・教科書にない資料の呈示
- ・さまざまな形での資料の呈示
- ・スムーズな呈示

問題点

- ・スクリーン中心の一方通行の授業展開
- ・結論ありきの強引な授業展開
- ・生徒の発言を拾いきれなかった
- ・授業内容・資料についての予備知識の不足

生活・健康系(保健体育)コース

中学校における武道の実技指導について ～用具工夫の授業実践例として～

指導教員 木原資裕
坂本和文

市川将史
上間達也
中野 彰

武道(剣道)教材に対する問題点

- 教具の問題(用具の不足)
- 生徒の気持ちの面での問題(痛みなどの恐怖心)
- 授業時間の問題
- 場所の問題(剣道場なし)
- 剣道経験のある体育教師の不足

特に 、 、 に関する改善案として



スポーツチャンバラの用具を使用し、剣道未経験の大学院生による授業展開の可能性を検討すること。

スポーツチャンバラの用具を使用した理由



・剣は軽量であり、スポンジ性で柔らかいため痛みが軽減され、面は着脱が容易であり、授業における試合形式への移行及び攻防の展開に対する習熟度向上が早期に期待できる

・剣道未経験者の指導に関しても、剣の扱いが容易と考えられ、指導をより効果的に行うことが期待できる

授業時間、学年、生徒数

授業時間: 4時間(50分授業)
学年: 鳴門教育大学附属中学2年生男子
生徒数: 80人(1, 2組40人, 3, 4組40人)

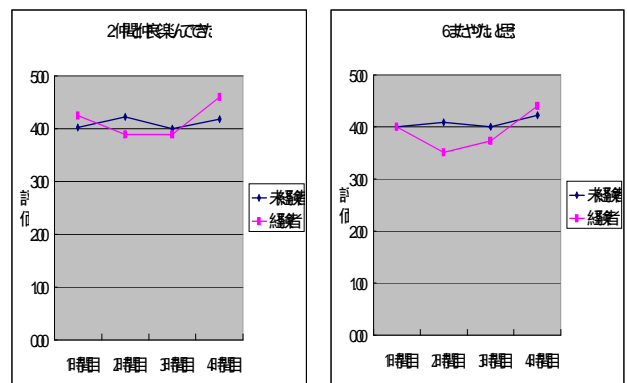
授業撮影

教師撮影用カメラと生徒撮影用カメラの2台を設置して撮影を行った。

今回の剣道授業における特徴

スポーツチャンバラの用具を使用
剣道歴46年(指導歴32年)の教師と剣道未経験の大学院生による授業
剣道場がないため、体育館における授業

アンケート結果



面打ち指導



剣道経験者

剣道未経験者

試合の攻防場面



まとめ

- ・アンケート結果によると、両者ともに大きな差はみられなかった。
- ・スポーツチャンバラの剣を使用することにより、剣道未経験者でも剣の扱いが行いやすく、容易に指導が行えた。



剣道未経験者による授業展開の可能性がうかがえた。

言語系コース(英語)

- 小学校における「英語ノート」(試作版)にもとづいた外国語活動の授業実践:
「英語ノート」の実用可能性と課題 -

言語系コース(英語)小学校班

協力教諭(学級) 吉岡壮吉教諭(鳴門教育大学附属小学校4年1組)
指導教員 兼重昇 夫明美
受講生 上原小代子 上林正佳 宮倉真奈美 谷谷子

28

グループ (教材・教具の活用)テーマ (1)

(2)

「児童・生徒をひきつけ、力をつけられる

(3)

教材・教具の開発・利用・工夫を考える

(1)について:児童を引きつけるとは?

小学生児童は何を持って楽しいとするか? (山森, 2008) (佐藤, 1996) (河村, 2001)

世界づくり:新しいものに触れる喜び

仲間づくり:他者と関わることの心地よさ

自分探し:認知的な思考活動など内面的な活動から得られる自分ののびの心地よさ

児童が世界、仲間、自分に触れ、思考を深めたり、気づいたりする。

児童の発達段階や興味・関心、自発性

他教科・領域等との関連

活動のバランスやバリエーション

(2)について:力とは?

小学校学習指導要領小学校外国語活動目標から

外国語を通じて、

言語や文化について体験的に理解を深め、

積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り

外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら

コミュニケーション能力の素地を養う。

人権教育から

仲間づくり

(3)について:教材教具について

英語ノートという教材や授業の中で使用する教具の開発・利用・工夫を行い、その実用可能性や

課題を考える。

29

- 小学校における「英語ノート」(試作版)にもとづいた外国語活動の授業実践
:「英語ノート」の実用可能性と課題 -

ひきつけ、力をつけられる教材・教具とは?

(1) 児童が言語や文化について体験的に理解を深めるなど、新しい世界に触れることを楽しみ、思考を深めたり、気づいたりできる。

(2) 仲間とふれ合うことを楽しみ、仲間について思考を深めたり、仲間の良さががらばりに気づいたりできる。

(3) 自分を知り思考を深め、自分自身や自分ののびに気づくことができる。

(4) 児童の発達段階や興味・関心に合い、自発性を大切にする。

(5) 他教科・領域等との関連がある。

(6) 積極的なコミュニケーションの態度が育成される。

(7) 外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみがある。

(8) 活動のバランスやバリエーションがある。

以上の8点。

30

- 小学校における「英語ノート」(試作版)にもとづいた外国語活動の授業実践
:「英語ノート」の実用可能性と課題-

(時間配分)4時間1単元

(授業者)受講院生が1人1時間ずつ行う。

(本授業の1時間目標)

第1時 国、地域、生活スタイル、好みの違いなど、人によって朝食や昼食に食べるものが違っていることを知る。
身近な人でも、人によって朝食や昼食に食べるものが違っていることを知り、誰のためにどんなランチメニューを考えるか計画を立てる。
食べ物に関する英語に慣れ親しむ。

第2時 食べ物や料理名を使った「クイズやゲームを楽しみ、食べ物や料理名の英語に親しむ。
食べ物に関する英語に慣れ親しむ。

第3時 友だちの好みを尋ねたり、自分の好みを伝えたりする。

第4時 友だちを思い、自分なりの工夫をしてランチを作る。
出来上がったランチをグループの友だちにしっかり発表しようとする。
友だちの工夫した点などに気づく。

31

- 小学校における「英語ノート」(試作版)にもとづいた外国語活動の授業実践
:「英語ノート」の実用可能性と課題-

(内容の決定)第4時に「思いやりいっぱいランチメニュー」を作成するプロジェクト学習

(評価の決定)自己評価シート、自己評価後の話し合い活動

(活動の再配列)ねらいを達成するために効果的な活動を配列、様々な授業形態(一斉学習、グループ学習、ペア学習など)、必要に応じて学習の繰り返し。

(発展的・活動の追加)ペアの友だちの思いやりいっぱいランチメニューを作る。家庭科の学習との関連(指導案の作成、教具の作成)

32

- 小学校における「英語ノート」(試作版)にもとづいた外国語活動の授業実践
:「英語ノート」の実行可能性と課題-

「授業の振り返り」

(英語ノートの教材としての活用の有用性)

- (1)母語でない外国語を用いることによって、一生懸命聞いたり話したり、積極的に言葉に関わろうとすることができる。
- (2)外国語を用いたコミュニケーションを通して、コミュニケーションの楽しさを体感する。
- (3)外国語の音声やリズムに慣れ親しむと共に、日本語との違いを知り、言葉の楽しさ・豊かさ気づき、言語に対する関心や興味を育てる。
- (4)外国語を通じたコミュニケーションを通して、他者理解・自尊感情を高める。
- (5)コミュニケーションを通して思いやりの心をはぐくむ。
- (6)コミュニケーションを通して多様な考え方に気づく。
- (7)各単元の指導内容が、学習で身に付けた知識をつかって、物を作る、ゲームをする、挨拶をする、などの具体的行動につながるようになっていっているので、興味関心を引き起こすことができる。
- (8)電子教材と組み合わせることで、音声とそれが示す絵や場面をより強く結びつけて指導することができる。
- (9)イラストや写真が中心なので、文字を介さずに英語の言い方を学ぶのに適している。

33

- 小学校における「英語ノート」(試作版)にもとづいた外国語活動の授業実践
:「英語ノート」の実用可能性と課題-

「授業の振り返り」

(英語ノートの活用の問題点)

- (1)英語ノートは、そのまま活用するのではなく、**目標や児童の興味関心・発達段階に応じて弾力的に運用**していく。英語ノートでは、内容が4時間程度のユニットに分けられているが、柔軟に取り扱い、**精選したり軽重をつけたりしていく必要がある**。
- (2)ユニットは最終目標をしっかりと決め、それに向けて**1時間目からしっかり積み上げていく**ことが大切。**最終目標もいるいるなパターン**があることが望ましい。
- (3)**子どもの実態**を知っていないと効果的な授業ができにくい。また、他教科との関連づけによる内容の深まりもできにくい。また、週一時間であるので、**担任以外だとモチベーションも持たせ続けにくい**。
- (4)複数で指導するとクラスルームイングリッシュに統一がなかったこともあった。学年複数級など、また学年間の系列も考えて共通理解が必要だが、打ち合わせ時間が取りにくい。
- (5)運用については、同じであるべきところは何か、違って良いところはどこなのか、**担任や学校の取り組みによって、素地に差が出てくるのではないかと**思われる。

(今後の課題)

- (1)今回のメインのテーマではないが、**評価に関しても途中から試行的に加えた**。そのコンセプトは今日の授業は楽しかったですかといったものではなく、**自分のことばで書かせる**。ただし自由筆記だとかけないので、**授業でしたこと気づいたこと(友だちの良さを見つけていく)次時への課題などを書く**ようにさせた。4時間の児童の変化については分析していない。評価の方法と仕方をさらに研究していく。

34

全グループのまとめ

教材・教具 = 興味・関心・態度の向上をはかり、
楽しいだけでなく、力をつけることが目的

各グループの取り組み

- 子どもの工夫や表現活動、ものづくりへの関心
- わかるためのデータの視覚化、デジタル教材の活用
- 教育課程の変化と現場での対応、教具・指導の工夫
- 教材の弾力的・柔軟な活用、他者への思いやりのこころ



学習のねらいを明確にし、子どもたちや学習
環境の実態に即した教材・教具の工夫・活用

グループ 共通作業課題「教科のリテラシーをどうつかみ、教材・指導法の開発にどう活かすのか？」

1. はじめに

1.1 グループ の目標

我々のグループでは、目標を「教科のリテラシーをどうつかみ、教材・指導法の開発にどう活かすのか？」と設定した。

1.2 実践にあたっての課題

以上の課題を達成すべく、各教科チームがそれぞれの研究テーマをもとにリテラシーを捉え、そのリテラシーを育成するための授業や指導法を開発し、実践をおこなった。

しかし、グループ全体で実践成果の報告会を行った結果、以下のような課題が浮き彫りとなった。

教科はこのリテラシーをどう捉え、授業開発を行うか？
各教科のリテラシーに対する理解の、共通点と差異を認識し、それをグループ全体で教科・領域教育の研究課題として共有することは可能か？

1) 各教科領域の固有性

学校教育では、教科が分化しているため、「リテラシー [literacy]」というコトバを解釈し概念化して実践する際に、実践レベルで各教科チームでリテラシーのとらえ方に差異があった。この差異については、後に各教科の実践報告において明らかとなる。

2) 各教科共通のリテラシー概念の追究

グループ では、リテラシーの捉え方に関するチーム間の差異を認めつつ、各チームの教育内容を包括できるように、リテラシーの概念を次のように捉え直し、共通理解をはかった。

リテラシー概念 基礎基本， 一般的知識 + 思考技能， 人間力

基礎基本

リテラシーを「ある分野に関する知識・能力」と考えれば、まずある分野に関して最低限不可欠な知識・能力がある。(ex. 語彙の獲得，運動においての体力，ある事象の年代把握)

一般的知識 + 思考技能

「知る」と「分かる」の違いというべきものである。社会科を例にして説明すると、

ex. 「1192年に源頼朝が征夷大將軍に任命された。」(歴史的事実を記述した知識)
「鎌倉時代とは、貴族を抑え武士が社会を支配した社会だ」(事象による時代解釈)
をベースとして が推論されると考えられる。
しかし、 はその他の歴史史料の分析によればそうとはいえない、解釈もある。
すなわち、 は から発展的に思考を展開し、解釈を行っている。

以上のような、リテラシーのとらえ方があり、このような知識から概念を獲得する働きを二つ目のリテラシーとして捉えた。

人間力

教科固有のリテラシーは、要素を還元する傾向が強い。しかし、教育が人格の陶冶をめざす営みであることから、各教科の営みは本質に「子どもの人格の陶冶」が内在している。

(ex. 言語の習熟 コミュニケーション力の発達に寄与)

1.3 小括

グループ では、まず各教科チームがそれぞれの研究テーマをもとにリテラシーを捉え、その指導法を考え実践をおこなった。その後、実践報告を共有することを通して、グループ全体で実践を共有できる枠組みとしてリテラシーの概念を捉え直し、その新たなリテラシーの概念的枠組みにもとづき各教科チームのリテラシーを再解釈した。

以下、各教科の実践の報告から各教科のリテラシーの内容を報告する。

2. 実践研究の事例報告

2.1 社会チーム(桑原光章, 阿部靖, 平村佳子)

1) 課題 「思考力を培う地理歴史科の授業開発」

学校現場からの「授業の進度を確保しつつ、知識偏重になりがちな文化史学習の授業を生徒が参加して、思考力を育む授業にしたい」という声に基づき、「思考力を育成する文化史学習(日本史B, 世界史B)」を開発することにした。

2) 実践の概要

2009年2月18日に, 世界史B(平村), 日本史B(阿部)ともに2時間構成の小単元の授業を実施した。

世界史...「ルネサンス」概念を, 古代・中世・近代の史料の比較検討を行い, 当時のヨーロッパの社会構造を理解することで, 把握する。

日本史...歴史学や文化人類学における「文化概念」自体を, 安土・桃山文化の「時代区分」論や美術作品や建築などの桃山文化を構成するモノの批判を通して問い直し, 社会における文化の概念を批判的に考察することを目指す。

3) 成果

生徒達は, 普段の授業では取り組む時間のない資料読解や分析にとまどいながらも, 手応えを感じていた。「教科書」に書いてあるから「事実」とする態度ではなく, 史実を解釈するという思考の方法に気づいたようである。

4) まとめ: 社会科のリテラシー

時代の社会の特質・構造を説明した理論的知識と知識の活用の技能・方法(知識探究のための技能・方法)とがむすびついたもの。

2.2 英語チーム(中学)(石引英莉子, 岩野真由美, 長井志保, 森川真由美, 野中惇, 下川理恵, トエスン・リシャライチ)

1) 課題 「中学校英語科授業のプラス1時間に対応するか—英語スキルアップトレーニング法の開発—」

鳴門教育大学附属中学校の英語科教員から提起された中学校3年生対象の英語スキルアップトレーニング法の開発を行うことにした。

2) 実践の概要

「積み上げ型の英語教育」とは, 単元ごとに割りふられた文法項目や語彙を積み上げて学んでいくという形式のことである。この背景には, 単元ごとに学習項目を定着させて積み上げていくことにより, 最終的にそれらの総和としての英語力が獲得されるという教育観・学習観があった。しかし, この「積み上げ型の英語教育」では, 各単元の学習項目が定着することはあっても, 単元を超えて既習項目を総合的に活用し, コミュニケーションを図ることができる段階には到達しないという現状がある。このような問題を解決すべく, 私たちは生徒の英語力の育成を「体力づくり」にたとえた。従来の「積み上げ型の英語授業」では, 英語の「体力」を構成する各部の「筋力」, 英語でいうならばbe動詞, there is 構文, 3人称単数現在形などは個別に鍛えられている。しかし, コミュニケーション活動の際にそれらを総合的にバランスよく使いこなせないのは, 英語の「体幹」が十分に養われてこなかったためととえることができる。したがって, 各部の筋力をバランスよく使うための体幹を鍛え, 英語体力を強化する「体幹強化型の英語教育」を考えていく必要がある。私たちは英語の「体幹」を「語順」と捉えた。そして, その語順を英語に特徴的な文構造といった「構文」と, 名詞の「後置修飾」に分けた。そして, これらの英語の体幹を鍛える方法を, それぞれ「3次元構文トレーニング」「名詞の後置修飾トレーニング」と名づけ, 「英語「体幹」トレーニング」と呼び, その活動案を開発した。

3) 成果

以上の考えをもとに, トレーニングの具体案をまとめ, 『英語「体幹」トレーニング・ハンドブック』を作成した。このハンドブックでは, 英語「体幹」トレーニングの意味, 3次元構文トレーニングと名詞の後置修飾トレーニングの目標・主旨とねらい, トレーニング方法の具体案を提示している。

4) まとめ: 英語科(中学校)のリテラシー

私たちのチームでは, 中学校英語教育における「リテラシー」を「語順」と捉えたことになる。すなわち, リテラシーの3分類の「基礎・基本」に相当する概念であると解釈できる。

2.3 英語チーム(高校)(福島知津子, 表昭浩, 原田浩典, 碓川友規, 瀬部浩子, 横山さゆり)

1) 課題 「高等学校における英語ライティング指導の改善」

鳴門高校からの要望と前年の研究に引き続き, 英語ライティング指導の改善を行うことにした。

2) 実践の概要

方法としてマッピング指導を用いることにした。私たちが教材を作り、それを実際に協力校の先生方に実践していただくという形をとった。今回のマッピング指導の目標としては、マッピングによって「何を書けばいいのかわからない」というのを解消すること、と英作文の量を増やすことができるのでは？ということである。

実践の方法は、辞書は使わずに「携帯電話についてどう思いますか」という題で10分間英作文を行ってもらった。その後、私たちが用意した教材でマッピング指導を10回行い、最後に事前テストと同じ条件で事後テストを行った。

3) 成果

スライドの成果以外でも、何を書けばいいのかわからない状態をマップを使って一度整理することができるようになったので文の数を増やすことができ、結果として英作文初級者のほうが高い効果を得られていることから、マッピング指導は英作文の基礎を作ることに適していることがわかった。

4) まとめ

私たちのチームでは高校英語教育における「リテラシー」を「英作文」と捉えたことになる。英語を使って自分の考えや議題に対する知識を表現・思考することから、すなわちリテラシーの3分類の「一般的知識+思考技能」に相当する概念であると解釈できる。

2.4 保健体育チーム（池上哲也、植田彩貴、白川恭久、田中徹）

1) 課題「中学校体育授業でいかにコーディネーション能力を高めるか」

学習指導要領の改訂により、現行の指導要領よりも学習内容・指導内容（技術やポイント）が詳しく明記された。それに伴い、評価のポイントが明確になった。

新学習指導要領によるバスケット・サッカーなどのゴール型の種目では、「空間に走りこむなどの動き」が重要になった。

それにより、実施校から「空間を使える技能」をコーディネーショントレーニング(以下COTと称す)によって、育成して欲しいという要望があった。

2) 実践の概要

今回はドイツのコーディネーションの概念をもとにした。ドイツのコーディネーションは、神経系を鍛えることによる動きづくりである。コーディネーション能力を向上させることで、動きをスムーズにしたり、状況や環境の変化に上手に対応したりすることができるようになる。これにより、さらに高い次元の動き、巧みな動きをすることができるようになり、運動パフォーマンスの向上につながる。

そして、ドイツのコーディネーションの概念によるとコーディネーション能力は7つあり、そのうち「空間を使える技能」に関わるのは定位能力であった。このことから、今回は定位能力の向上に重点を置き、授業の構成を検討した。ここで言う定位能力とは、場と物の関係で、姿勢や動作を時空間的に変化させる能力である。

3) 成果

このことを踏まえて、実際の体育授業でCOTをどの単元領域で扱うことができるのかを検討した。その結果、COTは小学校5年生～中学校3年生では、「体づくり運動」領域の「体力を高める運動」の内部事項である「巧みな動きを高めるための運動」に関連させて指導ができると考えられた。

次に、どの年齢の子どもたちに何を教えることが最も有効なのかというCOTの適時性について検討した。

コーディネーション能力に関わる動作の修得の年間発達量は8歳をピークに急激に下降する様相を示す。つまり、この時期にCOTを重点的に行うことが子どもたちの動きを多様にし、巧みにする上で最も重要であると考えられた。

また、コーディネーション能力が重点的に形成される学年は男女共にほとんどの能力が小学校段階で形成されるなか、空間定位能力に限り中学校段階で重点的に形成される。これは、実施校からの要望であった「空間に走りこむなどの動き」の修得は、中学校段階において育成することが最も適していることを示す。

4) まとめ：保健体育科のリテラシー

最後にCOTとは、何事にも対応し、応用できるようになるためのトレーニングである。つまり、COTによって生きていく上での対応力・応用力を身に付けることになり、「人間力」の向上につながるものと考えられた。

2.5 国語チーム(石田みらい, 高畑博紀, 長島和子, 横川唯)

1) 課題 「メディアリテラシーを育てる中学校国語科指導」

メディアリテラシーを育てる中学校国語科指導

2) 実践の概要

メディアから発信される情報に対し, 受け手としてのクリティカル(批判的)な視点を養うことを目標として, 附属中学校1年生を対象に3時間の授業を行った。

本実践は「パンフレット大研究」と題し, 身近にあるパンフレット(リーフレット)を改めて見直すことによって作り手の意図やそれに伴う工夫に気付かせることをねらいとした。

3時間の授業のうち, 1時間目は教師主導でモデル授業を行い, 2枚のパンフレットを比較して表現の違いやパンフレットの構成要素(配置・色・字体・雰囲気等)を全員で確認した。2時間目は生徒4人からなる班活動とした。モデル授業を参考にしながら新たなパンフレットを使い, 自分たちでその特徴を明らかにするよう作業をさせた。3時間目は2時間目の成果物をクラス内で見あい, 生徒同士が交流することによって新たな気づきの機会を設け, その結果を発表させた。

3) 成果

パンフレットには様々な工夫が施されていること, さらに誰に向けて作られたか, 目的は何かによって工夫の仕方にも違いが表れていることに気づくことができた。

メディアからの情報を受容するだけでなく, 表現されたものの背後にある意図に目を向け, 批判的に分析する姿勢は, 現代社会を生きる上で必要なものである。国語科の読解においても批判的な読みは重要視されており, 今回の実践はその第一歩でもある。

4) まとめ: 国語科のリテラシー

パンフレットの工夫とその意図に気づかせることは, 表現の背後にあるものを思考(探究)させることにつながった。さらに, クリティカルな視点の重要性に触れることによってメディア社会を生きる市民としてのあり方を示した。

3. まとめ

「1. はじめに」において述べられているように, グループでは各教科の教育内容を包括できるような共通のリテラシー概念の捉え直しを行った。

当初, 各教科チームがそれぞれ授業を行い, その実践報告を聞きあったものの, グループ共通の課題について議論を深めていくということにはなりにくかった。これは, 中学校は教科担当制であり, 他教科の内容を互いによく知らないという状況に加え, チームを超えてリテラシーのとらえ方が十分に共有できていなかったためと考える。

そこで各チームが自分たちの実践を振り返りながら, 共有できる枠組みとしてのリテラシー概念を全員で考えることになった。その結果が上述の「基礎基本 一般的知識+思考技能 人間力」である。その共通の概念的枠組みに今回の各チームの実践を改めて当てはめると次のようになる。

社会チームが追究した「理論的知識と知識の活用の技能・方法」は「一般的知識+思考技能」というリテラシーであり, 英語(中学)チームの「語順」は「基礎基本」, 英語(高校)チームの「英作文」は「一般的知識+思考技能」, 保健体育チームの「対応力, 応用力」は「人間力」, 国語チームの「表現者の意図」と「メディア社会で生きる力」はとをそれぞれのリテラシー概念としている。これを表にすると以下の通りである。

[表: リテラシーの概念的枠組み]

リテラシーの概念	基礎基本	一般的知識+思考技能	人間力
社会チーム			
英語(中学)チーム			
英語(高校)チーム			
保健体育チーム			
国語チーム			

このように各チームが追究したリテラシーをこの概念的枠組みに基づきまとめることによって, それぞれのリテラシーの位置関係が見えてきた。その結果, 各チームは自分たちの実践のリテラシーを相対化して捉え直し, さらに今後の研究の方向性に関する示唆も得ることができた。

以上, 異なる教科が集まったことによって, 一教科内だけでは気づかないことに気づくことができ, 新たな視点を得ることにつながった。今回の結果が教科を超えたレベルで教師が協働して子どもを育成する糸口になればと考えている。

講 評

徳島県体育協会 専務理事 宇 山 孝 人

閉 会

主催者代表挨拶

鳴門教育大学 理事 田 中 雄 三
